

秋山真之の評

或曰く、伊予松山に人ありやと問はば、君は自ら我なりと答へん。大学予備門に人ありやと問はば、君は自ら我なりと答へん。其気感ずべし、其意許すべからず。才子守才愚守愚少年才子不及愚とは名言なり。兎に角、自惚うぬぼれするは他人より之を見れば、自惚れぬのみか却つて之を悪にくむ者なり。

見るほどに 見てくれもせぬ 踊かな

或曰く、君は学問左程博識を極めたりと言ふ能はずと雖も、侃然かんぜん事務に当り之を抛理して、其当を過たず、其職務を尽くすことを得るは、同友中独り君に於て之を見るならん。是畢竟ひっききよう、君の俗才に長ぜるものにして余輩の大に之を依頼する所のものなり。其氣象は真に人に信愛さるる風ありと雖も、動もすれば人と争論を開き、為に友誼ゆうぎを破るの恐あり。此等の点に至りては少しく軽躁に失するもの如し。其勉強の仕方に至りては実に感服を表せざるを得ざるなり。

或曰く、当今の書生活発ならんことを欲して軽躁に陥るもの此々是皆、子が如きも活潑と言えは活潑と言ふべし。軽躁と言えは軽躁と言ふべし。蓋しけだ子は六の軽躁を有し四の活潑を有するものと言ふ可し。然り、而して君の如く普通の才を有するは余の未だ嘗て見ざる所なり。然れども、其才たるや大才あるにあらず、俗の「器用」なるものに過ぎざるなり。其例を言へば、浄瑠璃の真似をなし、都々逸を歌ふ類なり。子は終身一の扳手にして果てんのみ。大事をなすに至らざるものなり。